

アメリカ地理学における 地域概念の形成

野 尻 亘

I は じ め に

現行の文部科学省の中学校指導要領解説社会科編には後述するところの「等質地域」と「結節地域」という概念が出てくる。中学校社会科教諭にとって常識であるはずのこの概念が地理学史の上でいつ形成されたのかについて、さる事典への原稿執筆を依頼された。そのことが、この小論「アメリカ地理学における地域概念の形成」の執筆の契機である。

とは言え、筆者自身がアメリカ地理学史からは長い間遠去かっていたため、1920年代からの文献を集めることから始めざるを得なかった。そのため、夏休み中の帰宅途中に大阪市立大学学術情報総合センターに夜遅く連日通い、文献を渉猟した。事典の原稿制限の分量をこえる情報が筆者の手元に集まった。また日本の先行研究も講読した。しかし筆者が英語文献を読んで知り得た内容は、すでに杉浦芳夫（1986, 87, 89, 91, 99）・立岡裕士（1985）の諸研究によって言及されている。それゆえ本研究は、学外の学会誌に投稿できるほど、オリジナリティは高くはないであろう。

しかし、日頃からお世話になった林宏作先生（中国学）の退官記念論集には何かを執筆しなければならない。また日頃の講義の草稿としてまとめ

* 本学経済学部

キーワード：景観，地域的分化，等質地域，結節地域，機能地域

て置くことも得策である。そのため、学内のこの場に執筆させていただくことをお許しいただきたい。

なお、アメリカ地理学における地域概念に関する論争の背景として、以下の予備知識が必要となろう。19世紀以降の近代諸科学の発達によって、専門諸科学が深化するなかで、地理学がどのような基準で何を対象として選択して、地域を記述するのかということが問題となってきた。そのことについては、ドイツにおいて、哲学者のカント以来、関心となっており、ドイツの地理学者のヘットナーをはじめとして、さまざまな方法論が議論されてきた。アメリカ地理学における議論は、このようなドイツ地理学の先行する地域概念に関する議論をどのように解釈して、実践するかということについて、論争されてきたのでもある。

そして、アメリカの地理学史における地域概念を展望するには、次のようなキーパーソンと概念が重要なものとなる。戦前にはサウアーの文化景観の形態学、ホイットルセーの居住遷移、ハーツホーンの地域的分化の概念である。戦後は、ホイットルセー・アルマン・プラットによる結節地域・機能地域・空間的相互作用の概念からシステム論的考察へと発展する。そのうち、サウアーの文化景観の形態学については久武哲也（2000）によって、またハーツホーン（Hartshorne, 1939, 59）の地域的分化（areal differentiation）については、野村正七・山岡政喜による翻訳があるので、それらにはここではあまり言及しない。また生態学的方法論についても紙幅が大部になるので、ここでは言及をさける。

そこで、むしろ筆者は本稿で、日本の地理学ではあまり紹介されてこなかったホイットルセーやプラットを中心に述べることにしたい。一般に地理学史の基本文献とされるジョンストンの『地理学と地理学者』*Geography and Geographers* においては、「等質地域（uniform region）」と「結節地域（nodal region）」の概念はハーツホーンの地域的分化の概念とともに形成

されたとしている (Johnston, 1991: 43-44)。しかしハーツホーンの大部の著作 (Hartshorne, 1939) を隅から隅まで調べたがそのような言葉は見いだせなかった。後述するように、むしろ機能地域 (functional region) の言葉はプラット、結節地域 (nodal region) の言葉はアルマンによって最初に言及された (Ullman, 1953) が、ホイットルセーによって最初に詳しく定義されている (Whittlesey, 1954)。それゆえ、これまで日本の地理学では看過されてきたプラットやホイットルセーに光をあてることは重要であろう。そこにこの小論をささやかなオリジナリティをもってここに発表する根拠があると考ええるものである。

なお論文の構成として、まず第Ⅱ章では、文化景観の形態学と居住遷移の概念を比較し、サウアーとホイットルセーの方法論を対比する。次に第Ⅲ章では、サウアーやその同僚のライリーの景観概念への批判として書かれたハーツホーンの学説の中心的概念である地域的分化の概念について触れる。さらに第Ⅳ章では戦後の地域概念の核心を形成したホイットルセーらの結節地域・機能地域について考察を加える。最後に第Ⅴ章では、結びとして、その後のアメリカ地理学における地域に関する議論について、簡潔に展望することにした。

Ⅱ 景観論と居住遷移

アメリカ地理学では19世紀に環境決定論の影響が強かった反動もあり、20世紀になると地域研究がさかんとなった。しかし、いくら詳細に地域内の諸要素の分布図を重ね合わせても、客観的で等質な地域単位を析出することは困難であった。その苦悩を解決するために、さまざまな地域概念に関する法論が提案されてきた。

その1930年代からの地域研究の主な流れは以下のとおりである。①自然地理学と人文地理学は区分されるもの、分離されるものではなく地理学は

統一的な領域であるとされた。②地域的な統合研究は総合された地理学研究の最高の目標とされるが、それは固有の方法論によるものではなく、研究者の解釈的なアプローチによって実践されるものである。③しかし、分類や記述よりも時系列的なプロセスが重要であることを除いては、地域的な総合を達成する方法論に関する共通した合意は形成されてこなかった。

特に世界大恐慌後の1930年代は、TVAの開発をはじめ、ニューデール政策のもとで中西部の土壤改良など、地域開発が盛んとなった。土地利用調査をはじめ、多くの地理学者がこれに参画し、中西部に地域研究のモノグラフが蓄積する伝統が築かれてきた。

この章では、それらの地域概念のうち、サウアーの文化景観の形態学、サウアーと同じくバークレーの同僚のライリーによる地域主義批判と、後述するハーツホーンの方法論に依拠するホイットルセーの居住遷移の概念について比較して述べることにする。

サウアー (Sauer, 1925) の方法論はドイツ地理学の方法論の影響を受けたものであった。すなわち、ラッツエルの『人類地理学』があまりにも広範な内容で対象規定が欠落していたために、サウアーは地理学の研究対象を景観という物的な規定に限定することにした。そしてシュリューターの景観概念を取り入れ、景観の領域的拡がりや視覚性を重視するものであった。そして文化景観の遷移について、シュリューターの文化景観論とともにヘットナーの地誌 (コロロギー) の概念を融合させることを試みた。

文化景観の考察にあたってヘットナーは、文化型を文化段階と文化形態の統合されたものとして定義した。文化段階は時間的順序にともなう歴史的発生の段階や遷移である。しかしサウアーは当初はヘットナーの方法論の実践を試みるものの、文化形態を特定の地域のすべてのものについて検証することは不可能であり、それらを文化領域として統合し、歴史的に復元することは非常に困難であることを認識した。そのため、景観研究を物

的对象に限定せざるを得なかった。

当初のサウアーの景観概念をヘットナー流に景観を領域的な拡がりをもつものとして規定していた。しかし、後にサウアーは、地域地理学や地域的分化というハーツホーン・ヘットナー流の考え方を放棄していたのである。ハーツホーンは、シュリユーターやパッサルゲの景観論を重視し、ヘットナーの地域論を軽視しているとして、サウアー地理学を批判している(Hartshorne, 1939)。

またサウアーと同じく、バークレーの同僚であったライリーは、アメリカ地理学における地域主義を批判し、ドイツ地理学における自然地理学と人文地理学の二元論を克服する景観論を支持する論文を発表して、次章で詳述するようにハーツホーンを刺激することとなった。

ライリー (Leighly, 1937) の地域主義批判の要旨は次のとおりである。第一に地域単位を合理的・科学的に設定して、諸現象を統合することを否定した(地域の非実体性)。第二に、地域を記述の単位とするためには、科学者としてよりも、むしろ芸術家としての審美的な解釈と認知の方法が必要である。第三に文化は、場所だけではなく、時間とも結合している主張することで、環境決定論を否定した。第四に文化は達成された人工物としてだけではなく、感情にもとづく美的評価や歴史的理解が必要である。第五に文化景観の研究は、芸術の産物、芸術のトポグラフィーとして、土地への根付き方を理解しなければならない。

このような主張をもとに、ハーツホーンの操作主義的地域論(Hartshorne, 1939)とライリーの美的環境論(Leighly, 1937)は全面的に対立していくのである。

さらにホイットルセー(Whittlesey, 1929)は、居住遷移(sequent occupance)の概念を主張することによって、以下のようにサウアーの方法論と差別化をはかった。サウアーのように人文地理学を景観の研究を対

象とすることを放棄して、より論理的な特徴的な独自の科学として定義することを試みた。サウアーの景観研究の困難性はすべての可視的な、目に入るものを無限に対象としなければならないからである。むしろホイットルセーは、サウアーと異なり、居住遷移の概念を唱えることによって、自然景観と文化景観の関係を明らかにすることを人文地理学の研究対象として定義しようと試みたのである。すなわち、自然環境の変動、技術革新、人々の移住によって、居住景観は時期を追って段階的に変化していく。以前の居住占拠の様式を発生学的な起源として、後の居住占拠景観の段階がつくられていく。居住遷移の概念でもって、自然と歴史の融合がはかられるのである。

これは植物生態学における生態系の遷移の概念にアナロジーを持つものであった。具体的には、先住民の狩猟採集の段階・農耕移民の入植と農耕地の形成・鉄道の開通による自給農業から市場指向農業への変化・集落の形成・工業化・都市化といった文化景観の継起・遷移を問題とするものであった。

具体的に Thomas (1931) は、セント・ルイス近郊を事例として、開拓者・農民・集落の形成・鉱業集落の形成・工業化の段階をとって居住遷移の段階を分析している。

このようなホイットルセーの居住遷移の概念は、ドイツの景観研究やサウアーをはじめとするパークレー学派に存在する強固な歴史主義を排除するものであった。すなわち、地理学における歴史主義を回避するために、居住遷移の各段階について、「時の断面（クロスセクション法）」を用いて、編年的・時間的なものを地域的・空間的なものによみかえる方法なのである。

これは、後述するように地理学と歴史学を分離するハーツホーンの方針に従うものである。歴史学的対象と地理学的対象の混同をさけるために、

「時の断面」という考え方は、ドイツのヘットナーから受け継がれたハーツホーンの考えそのものであった。

III 地域的分化の提起とその背景

前章でのべたライリーの論文 (Leighly, 1937) に反発して、ハーツホーンは「地理学の本質」(Hartshorne, 1939) という論文を書いた。その批判の主旨は、ライリーが中西部の地域研究の伝統を否定して審美的な景観論をとねたこと、ドイツ地理学、特にヘットナーの方法論を正しく伝えていないというものであった。この「地理学の本質」は *Annals of Association of American Geographers* (AAAG) の二号分をほぼ埋めつくして掲載された。執筆を奨励し、その推薦の序文 (Whittlesey, 1939) を書き、異例の大部の掲載を認めたのが、当時の AAAG の編集長であったホイットルセーであった。

そこで、ハーツホーンが唱えた地理学の対象としての「地域的分化 (areal differentiation)」とは、気候・地形・植生・土壌・人口・土地利用・産業などを指標とし、それらの諸要素の複合体として規定されうる全地球や諸国家などの単位空間における、それらの指標の配列をもとにして地表の差異を研究する学問であると定義するものであった。

このように地理学が主たる研究対象とするのは関連関係の現存する空間や場所の多様性であるから、過去の現象の説明的・解釈的記述 (歴史的考察) は主たる目的ではない。地理学は発生学的概念を必要とはするが、歴史ではないとされる。

このことは、文化景観の歴史的理解に向けての文化史や歴史地理学を構築しようとするサウアーとは著しく対立するものであった。

ハーツホーンは政治地理学の方法論をライフワークとし、必ずしも「地域的分化」の方法論を実践しなかった。むしろ、その実践代表例としては

ホイットルセーの研究があげられる。

この代表的事例研究としてホイットルセー (Whittlesey, 1936) は、作物と家畜の組合せの有無、資本・労働・土地利用の集約(粗放)性、自給作物か商品作物かの違い、農場の経営形態をもとに世界の農業地域区分を発表している。これは今日でも日本の中学・高校の殆ど全ての社会科地図帳に「世界の農業地域区分」として図が掲載され、一般の人々にもおなじみの学説である。

すなわち、ハーツホーン (Hartshorne, 1939) は、ドイツのヘットナー (Hettner, 1927) の影響を受けて、地域的分化 (areal differentiation) の概念を唱え、1940～50年代のアメリカ地理学に大きな影響をおよぼした。それは地表における気候・地形・土壌・資源などのさまざまな分布の違いと、それらの空間的關係から説明される地域叙述の方法論であった。場所から場所への一定の事物の違いとお互いの場所におけるそれらの結合から解釈されるので、地域は選択される指標によって便宜的に解釈される。つまりそれは、地域単位を何らかの実体であるかのようにとらえて文化景観の形態的側面を重視する地理学を否定するものであった。地域は実体ではないので、個別の地域内の要素についてのみ歴史的考察が可能であり、景観全体の変遷史という考え方は否定された。また研究対象を可視的な景観に限定する必要はなく、むしろ場所の違いによってより大きな変化やさらにほかの事象の変化をひきおこすような事象を選択することが重要とされた(第1表参照)。

このようなハーツホーンの思想の背景として、ドイツの地理学者ヘットナーの「コロロギー Chorology」の考え方がある。コロロギーとは、地表のあらゆるものを対象とすることを放棄して、因果関係のつながりのもとにある事象相互の空間的分布をもとに地誌、地域叙述を行う方法論である。当然のこととして、因果関係あるもののみを対象として、地域が分析され

アメリカ地理学における地域概念の形成

第1表 アメリカ地理学界における地域に関する議論の構造

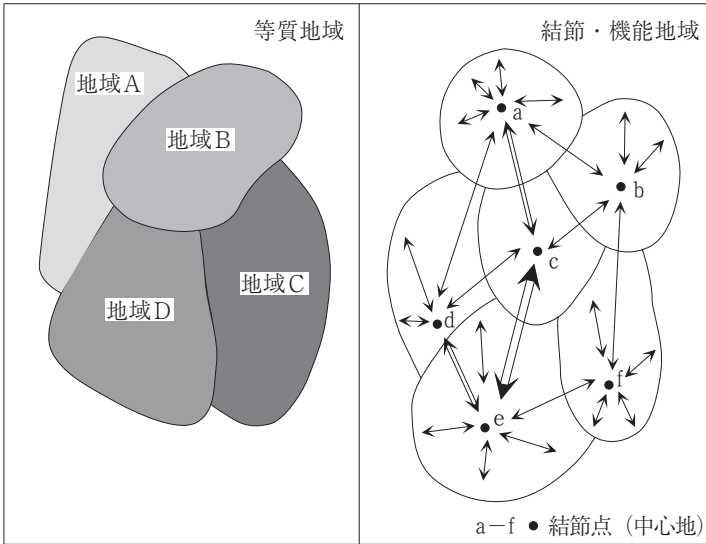
サウアー	ライリー		ホイットルセー	ハーツホーン
文化景観の形態学	審美的なトボグラフィー (地誌)		居住遷移 Sequent occupance	地域的分化 areal differentiation
地域実体説	地域統合の否定		地域便宜説	地域便宜説
景観論	景観論		地域論 コロロギー	地域論 コロロギー
シュリユーター・ パスサルゲに依存	リッター・ シュリユーター パスサルゲに依存	対 立	ヘットナーに依存	ヘットナーに依存
歴史的考察重視	歴史的考察重視		歴史的ではなく 発生的考察 地理学と歴史学を分離 等質地域と結節地域の 概念区分を明確化	歴史的ではなく 発生的考察 地理学と歴史学を分離

るのであるから、地域は何等かの実体ある存在ではなく、限定される調査対象をもとに研究ごとに便宜的に設定されるのである (Hettner, 1927)。

ヘットナーの考えは、カントの思想、特にドイツ西南学派 (新カント主義) のウインデルバンドとリッケルトの影響を強く受けた。歴史学と地理学は個性記述的科学であり、一般の科学が法則定立的科学であるのとは異なるのである。カント流の思想にもとづきヘットナーは、地域実体説を否定し、地域便宜説を唱え、歴史学的考察と地理学方法論を分離しようとしたのである (May, 1970)。

IV 結節・機能地域からシステム論的思考へ

しかし、このような地域的分化の方法論が諸地域の多様性を強調するあまり、一般化への道を閉ざしてしまうことも危惧された。ジェームス (James, 1952・1954) は、地域間の比較を可能にする地域的類似性 (areal likeness) にも注意を向けるように主張している。さらにホイットルセー



第1図 等質地域と結節・機能地域概念区分

(Whittlesey, 1954) はアメリカ地理学における地域概念について、「地域とは特定の指標の下で等質的で、内部的には、諸現象が関連しあって、凝集性をもち、任意の大きさの地表上の範囲である。」と定義した。そしてホイットルセーは、その地域概念を等質（均一）地域・結節地域に類型区分している。等質地域は、「とうもろこし地帯」や「綿花地帯」のように、地域内部においてある特定の指標や基準・定義の性質が等しい地域である。一方、結節地域はある中心点（結節点）を焦点として、人やものや情報通信の流動・循環の構造が認められる地域であり、通勤圏・商圈など、異なる基準によって多様な結節地域を設定することができる（第1図参照）。

さらに機能地域概念は、シカゴ大学のラテンアメリカ地誌研究者であったプラット (Platt) によって発展された。彼は環境決定論に対して、人文現象の多様性を主張する (Platt, 1948a, Platt, 1948b) とともに、対象とした

農漁村の地誌研究においても、都市化や工業化の影響のもとにある交通現象や買物行動（商圈）の実体を取り上げた（Platt, 1928）。またシカゴ周辺の小地域の地誌を取り上げた際には、そこに所在するシカゴ空港に発着する航空路のグローバルなネットワークを分析している（Platt, 1946）。このように小地域がそれをふくむ上位の大地域と機能的にどのように関係しているのか明らかにすることが試みられた。それは今日から見れば素朴な手法ではあるが、伝統的な地誌の方法に比較動態的な手法を取り入れたことと、彼の門弟から後に多くの計量地理学者を輩出したことにより空間学派の創始者であるともみなされている（Taaffe, 1974）。

そのなかの代表者の一人であるアルマン（Ullman, 1953）は、空間的相互作用（地域間結合関係）を解明する方法論として、補完性（complementarity）・介入機会（intervening opportunity）・移送可能性（transferability）の3概念をあげている。補完性とは、ある地域が農産物の産地や鉱物資源の産出地であったり、通勤目的地の都心がオフィス集積地であるように、他地域には無い機能を補完して輸送需要を発生させることである。介入機会とは、農産物が一番せり値の高そうな市場に発送されること、観光旅行の目的地や周遊地はいくつかの希望している候補地のなかから最終的に選択され決定されることなど、輸送目的地の選択決定に影響をあたえる他の地域の作用のことである。移送可能性は、輸送費に反映される距離的条件のほかに、生鮮品・危険品・重量容積大など貨物のもつ制約が輸送手段や輸送ルート選択に影響することなど、輸送の技術的条件を指している。アルマンはこれらの概念を用いて、全米各州の品目別貨物輸送圏を分析している（Ullman, 1957）。

このように特に第二次世界大戦後のアメリカ地理学における地域研究は、結節（機能）地域・地域相互の階層性・動態性の解明に関心をふかめ（Ackerman, 1953, Philbrick, 1957）、地域的機能組織のシステム論的研究

(Ackerman, 1963) へと向かうこととなった。その一連の潮流のなかで、ベリー (Berry, 1964) は、地理行列 (地域データ) に多変量解析を応用することで、地誌学的あるいは因子生態学的方法論と計量地理学の融合を試みている。さらにベリー (Berry, 1966) は、一般的な場の理論を多変量解析に応用することで、インドの貨物輸送を事例として地域の機能的組織を明らかにした。

V 結 び

このような議論を背景にプラット (Platt, 1962) は次のような興味深い指摘をしている。アメリカの文化地理学では、時系列的研究として、自然景観と文化景観の変化を取り上げてきたが、それには二つの方法論が共存してきた。その一つは、人間の居住にともなう移動 (流動) の機能的パターンであり、砂糖工場の各農場からの原料集荷圏や空港における航空旅客の結合関係など、機能論的アプローチからなる。その二つは、クローバーの人類学研究がサウアーを通して導入されたもので、文化景観の要素である建築物や農作物の起源と分布が、文化景観の発展として研究されるものである。これらの方法論を通して、中西部の地域研究は、地表における人間の活動と機能を統合して生態学的視点を形成してきた。このような機能的組織と文化的起源の研究の融合がアメリカ地理学の特色なのである。

これまで見てきたように、サウアー・ライリーの景観論とハーツホーン・ホイットルシーの地域主義の対立は第二次世界大戦前のアメリカ地理学界におけるドイツ地理学方法論の理解をめぐる大論争であった。一方、アッカーマンやプラットらによって、従来からの伝統的な地域研究のスタイルを重視しながらも、機能論的な関係的な地域研究を行う必要があると穏健な主張がなされてきた。そのことが、計量地理学や空間論的アプローチの基礎となった。アルマン (Ullman, 1953)・ベリー (Berry, 1964) やテ

フ (Taaffe, 1974) も伝統的な地誌研究と機能論的・システム論的研究を融合するような穏健な主張を行っている。これらは地理学全体としての統合性や融和をはかりたいからであると推測できる。

このような論争のなかで、アメリカ地理学界で重要な役割を果たしたのがホイットルセーである。ホイットルセーはアメリカ地理学会の編集委員長や会長として、ハーツホーンを支援し、また独自の地域方法論として、「結節地域」の概念を定義、提唱した。これまで、どちらかと言えば看過されがちであったが、ホイットルセーの存在を抜きにして、アメリカ地理学における地域概念を語ることはできないと言える。

なお、これらの文脈とは異なり、融和をはからない強硬な議論としてシェーファーがハーツホーンに加えた「地理学における例外主義」という批判がある (Schaefer, 1953)。ヘットナー流の新カント学派の解釈によって、地理学を法則定立的科学ではなく、個性記述の科学に落伍させたという強烈な批判である。日本の地理学界ではこのシェーファーの論文をもとに、計量革命の成立と計量地理学の確立とみなす傾向が強かった (野間, 1976)。しかし、杉浦 (1991) が指摘するようにアメリカ地理学界に対するシェーファーの影響はそれほど強くはなく、むしろシェーファーの主張する幾何学的な空間論よりも、プラットが主張する穏健な機能論的な空間論の方がアメリカ地理学への影響がより強かったと言えるのではないだろうか。

1970年代以降、計量地理学は論理実証主義であるとして、マルクス主義の批判的地理学・人文主義地理学・リアリズムの地理学・ポストモダンの地理学から一斉に批判を受けた。そして地理学において、新たに「地域的分化」や地域の個性を記述する方法論が見直されてきた。そこでは歴史性をふまえた批判的な地誌の記述こそが地理学の使命であるとされている。階級・ジェンダー・ポストコロニアル・エスニシテイ (民族性)・宗教・イデオロギーの違いによる地域的分化が研究の対象とされているのである。

このような現代の研究動向の前史，先行史的基礎として，小論の内容を批判していただければ幸いである。またハーツホーンやホイットルセーの地域概念は戦後，GHQ を通して日本の小中高の社会科学習指導要領における地域概念に影響をあたえたと筆者は推測している。冒頭でも記したようにまたそのことは今日の社会科学習指導要領にも影響が及んでいると考えられる。社会科教育史における，その点の解明については今後の課題としたい。

参 考 文 献

- 杉浦芳夫 1986. 計量革命と統計学. 野上道男・杉浦芳夫著『パソコンによる数理地理学演習』187-216. 古今書院。
- 杉浦芳夫 1987. Ackerman とアメリカ地理学の体制化 ——計量革命に関する一考察——. 地理学評論 60A: 323-346.
- 杉浦芳夫 1989. Garrison とその時代 ——アメリカ地理学再生の時——. 地理学評論 62A: 25-47.
- 杉浦芳夫 1991. Schaefer の「例外主義」論文誕生の顛末に関する一考察. 地理学評論 64A: 303-326.
- 杉浦芳夫 1999. Edward Ullman による空間の科学の探求. 人文地理 51: 1-22.
- 立岡裕士 1985. 現代地理学史の分析枠の構築にむけて ——Hartshorne パラダイムを例として——. 人文地理 37: 193-214.
- 野間三郎 1976. 『空間の理論』古今書院.
- 久武哲也 2000. 『文化地理学の系譜』地人書房.
- Ackerman, E. A. 1953. Regional research: emerging concepts and techniques in the field of geography. *Economic Geography* 29: 189-197.
- Ackerman, E. A. 1963. Where is a research frontier? *Annals of Association of American Geographers* 53: 429-440.
- Berry, B. J. L. 1964. Approaches to regional analysis: a synthesis. *Annals of Association of American Geographers* 54: 2-11.
- Berry, B. J. L. 1966. *Essays on Commodity Flows and the Spatial Structure of the*

- Indian Economy*. Illinois: Department of Geography, University of Chicago.
- Hartshorne, R. 1939. The nature of geography. *Annals of Association of American Geographers* 29: 173-658. (ハーツホーン, R. 著 (野村正七訳) 1957. 『地理学方法論』 朝倉書店).
- Hartshorne, R. 1959. *Perspective on the Nature of Geography*. Washington, D. C.: Association of American Geographers. (ハーツホーン, R. 著 (山岡政喜訳) 1975. 『地理学の本質』 古今書院.
- Hettner, A. 1927. *Die Geographie: ihre Geschichte, ihre Wesen und ihre Methoden*. Breslau: F. Hart. (ヘットナー, A. 著 (平川一臣・守田優・竹内常行・磯崎優訳) 2001. 『地理学 歴史・本質・方法』 古今書院).
- James, P. E. 1952. Toward a further understanding of the regional concept. *Annals of Association of American Geographers* 42: 195-222.
- James, P. E. 1954. Introduction: the field of geography. In James, P. E. and Jones, C. F. eds. *American geography: inventory and prospect*. Syracuse: Syracuse University Press. 3-18.
- Johnston, R. J. 1991. *Geography and Geographers Fourth Edition*. London: Edward Arnold.
- Leighly, J. 1937. Some comments on contemporary geographic method. *Annals of Association of American Geographers* 27: 125-141.
- May, J. A. 1970. *Kant's Concept of Geography and its Relation to Recent Geographical Thought*. Toronto: University of Toronto Press. (メイ J. A. 著 (松本正美訳) 1992. 『カントと地理学』 古今書院).
- Philbrick, A. K. 1957. Principles of areal functional organization in regional human geography. *Economic Geography* 33: 299-336.
- Platt, R. S. 1928. A detail of regional geography: Ellison Bay community as industrial organism. *Annals of Association of American Geographers* 18: 81-126.
- Platt, R. S. 1946. Problems of our time. *Annals of Association of American Geographers* 36: 1-43.
- Platt, R. S. 1948a. Determinism in geography. *Annals of Association of American Geographers* 38: 126-132.
- Platt, R. S. 1948b. Environmentalism versus geography. *American Journal of*

- Sociology* 53: 351-358.
- Platt, R. S. 1962. The rise of cultural geography in America. In Wagner, P. L. and Mikesell, M. W. eds. *Readings in Cultural Geography*. 35-43. Chicago: University of Chicago Press.
- Sauer, C. O. 1925. The morphology of landscape. *University of California Publications in Geography* 2(2): 19-53.
- Schaefer, F. K. 1953. Exceptionalism in geography: a methodological examination. *Annals of Association of American Geographers* 43: 226-249.
- Taaffe, E. J. 1974. The spatial view in context. *Annals of Association of American Geographers* 64: 1-16.
- Thomas, L. F. 1931. The sequence of areal occupance in a section of St. Louis, Missouri. *Annals of Association of American Geographers* 21: 75-90.
- Ullman, E. L. 1953. Human geography and area research. *Annals of Association of American Geographers* 43: 54-66.
- Ullman, E. L. 1954. Geography as spatial interaction. In *International Linkages: Proceedings of Western Committee on Regional Economic Analysis*. 63-71. Berkley: Social Science Research Council.
- Ullman, E. L. 1957. *American Commodity Flow*. Seattle: University of Washington Press.
- Whittlesey, D. 1929. Sequent occupance. *Annals of Association of American Geographers* 19: 162-165.
- Whittlesey, D. 1936. Major agricultural regions of the earth. *Annals of Association of American Geographers* 26: 199-244.
- Whittlesey, D. 1939. A foreword by the editor. *Annals of Association of American Geographers* 29: 171-172.
- Whittlesey, D. 1954. The regional concept and the regional method. In James, P. E. and Jones, C. F. eds. *American Geography: Inventory and Prospect*. Syracuse: Syracuse University Press. 21-68.

The Concept of Region in American Geography

NOJIRI Wataru

American geography of the 19th century suffered a major backlash due to the influence of environmental determinism. However, with the dawn of the 20th century, area studies became a major field. Yet even when much regional elements were broken down into detail and presented in terms of distribution, the difficulty remained of categorizing areas into objective, uniform regions. To address this difficulty, a variety of methodologies were developed regarding the concept of region.

Sauer's "Morphology of Landscape" (1925) marked the beginning of this movement, followed by the concept of *sequent occupance*, defined by Whittlesey (1929). This concept addressed the succession and transition of the cultural landscape over the course of developments such as the hunter-gatherer society of indigenous peoples; the immigration of farmers; the formation of villages; industrialization; and urbanization.

In contrast, Hartshorne (1939) was influenced by Hettner (1927) in Germany, proposing the concept of areal differentiation, which in turn had a dramatic impact on the field of geography in the United States in the 1940s and 50s. This topographical methodology cited differences in distribution of various aspects of the earth's surface including weather patterns, geomorphology, soil, resources, etc., and also explained the spatial relationship between them.

The issue here was that interpretations were made based on differences in specified phenomena between places. In other words, regions were conveniently interpreted in a way that suited the specific index that was chosen. This

meant rejection of the kind of geography that emphasizes the morphological aspect of the cultural landscape. Further, it was concluded that it was not necessary to limit research topics to visible landscapes; the new way of thinking emphasized the importance of choosing an event that would facilitate significant change arising from differences in location, or an event that had the potential to facilitate a change in other phenomena.

However, while this type of methodology tends to emphasize the diversity of different regions, it also tends to close the door to generalization. James (1952, 1954) asserted the need to pay attention to *areal likeness*, an approach that enables comparison between regions. In addition, Whittlesey (1954) categorized regions into uniform regions and nodal regions for purposes of study. The uniform region is characterized by specified indices, standards and definitions such as the Corn Belt and the Cotton Belt. In contrast, nodal regions are those that have a specific focal point; that is, a certain structure is expected of this central area, including the flow and circulation of people and information emanating from a specific focal point. Depending on different standards, such as commutable zone and consumer catchment area, one can identify a diverse array of nodal regions.

As noted above, studies in the field of geography in the United States, particularly in the post-World War II period, showed a deepening interest in clarifying the hierarchy and behavior of nodal and functional regions and regional interaction, paving the way toward system theory research on regional function systems. As part of this series of movements, Berry (1964) attempted to develop a fusion of the topographical or factorial ecology methodology and quantitative geography, applying multivariable analysis to regional data.

Keywords : landscape, areal differentiation, uniform region, nodal region,
functional region